

2013年に生活保護基準が引き下げられたことで、就学援助の所得基準を連動して引き下げる自治体が…。横浜市では、その影響で就学援助を受けられなかった子どもが977人のほり、そのうち前年度は援助の対象だった

のに今年度は外された子どもが762人。

入学準備や給食、部活、修学旅行などが補助対象で、平均支給額は小学生で年6～10万、中学生で3万～11万。「基本は自助」の政治に黙ってられない！

福祉のなごま

2014年
10月号
第280号
全国福祉保育労働組合

〒111-0051 東京都台東区蔵前4-6-8サニープレイスビル5FA
TEL 03-5687-2901(代) FAX 03-5687-2903
メールアドレス mail@fukuho.org
URL http://www.fukuho.info/
ツイッター @fukuho_info
発行責任者/多久和令一
2014年10月5日発行



第30回定期全国大会

9月
20日・21日
東京



「福祉は権利」 自分の言葉で伝えよう

大会宣言(要旨)

福祉と福祉労働が危機にさらされている今、私たち福祉保育労働の運動が持つ役割はとても重要です。

大会では、各地からの勇気づけられる発言に福祉保育労働の役割、魅力を実感しました。大会で報告された各地の運動の教訓と、決定した方針を確信にして、憲法25条の風化を許さず、「福祉は権利」実現のために、「みんなの一步キャンペーン」に取り組み、多くの人たちとの共同で世論や政治を動かしていきます。

※全文はHPに掲載しています

特別決議(要旨)

「平和こそ最大の福祉」

～憲法を守り平和で人間らしく生きる社会をめざそう！

世界では国家間の紛争に武力による介入が行われています。それは果てしない報復の連鎖を生み出し、多くの犠牲を生んでいます。

「戦争」と「福祉」は相容れません。戦争が貧困を生み、貧困が戦争を支える「負のスパイラル」に陥る危険があります。

たたかいはこれからです。「平和こそ最大の福祉」の言葉を胸に、「憲法を生かし、平和と福祉を守る」運動を進めていきましょう。

9月20日・21日に開催された第30回定期全国大会では、私たちの働きにくさの背景を押さえ、「仕方がない」で終わらせず、「おかしいことはおかしい」と言う各地のとりくみが語られました。たたかいの中で学び、たたかいを重ねて確信としていく、全国の教訓を交流する機会となりました。組織を拡大していくためには、組織の強化も必要だと確認し、強く大きな福祉保育労働をつくる意思統一をした大会となりました。



澤村書記長 討論のまとめ

仲間と「きずな」を深め 福祉保育労働を大きくしよう

モデル案の試行を重ねて経営も納得できる要求にまとめて4週7・5休を実現させたなど、職場

厳しい実態を客観的事実で訴え権利を守ろう

被災地からは、全国の仲間の支援があるから心が折れてもまたがんばれると語られました。3年間積み上げた被災地福祉労働者調査の結果を生かした支援を続けていきます。

憲法を守り活かすことが求められる情勢のなか、権利を守るために職場で奮闘する仲間の思いが集まった大会になりました。

仲間たちの支えを力にがんばる姿が

主体的・自覚的に学んだことを行動につなげることが大切です。職場の人手不足や過密労働の背景を知り、経営や行政に客観的事実を根拠に熱く訴えることで、職場闘争

組合の要求に見せ、魅力を伝え、仲間とつながることを大切に、自分の言葉で「福祉は権利」を語って「みんなの一步キャンペーン」をすすめる、新しい共済制度を活用して仲間を増やしていきます。

組合員の要求に寄り添った活動づくりに挑戦し、組織拡大は組合員を増やすだけではなく「きずな」の強化が大切だと思えたと、労働組合の本質をついた報告がされました。

での原則的な活動が要求実現につながることを共有できました。また、経営主義による管理・統制強化がパワハラ背景にあると指摘されました。職場の法令遵守度チェックにとりくみ、労働者の権利が守れない職場では、利用者の権利も守れないことを確認しあいましょう。まともな労使関係を築いて労働者の権利を認めさせるために、争議をたたかう仲間への全国からの支援を呼びかけます。

組合の魅力や自分の言葉で語り仲間を増やそう

春闘要求アンケートの全組合員からの回収を本気でめざします。



まんがタイム



被災地では、震災を伝える廃墟がなくなりつつある。しかし、復興が進んだかというところではない。仮設住宅に住む人々をほしめ、被災地の問題は3年半たった今も解決されていない。震災を風化させてはならない。震災の記憶も、今ある問題も、草の下に埋もれさせてはならない。(岡崎)

福祉の風

この夏、東北の仲間と共に、宮城県東松島市を訪れた。ここを訪れたのは大震災の3週間前、3年半ぶりだった。

会場だった「かんぼの宿松島」は、3階まで津波が押し寄せ廃墟と化していた。学習会を行った会議室のあった場所は、あらゆる柱が折れ曲がり、パーテーションはなぎ倒されていた。窓ガラスはなく、残っていたカーテンが静かに風に揺れていた。周辺は草に覆われた平野が広がっていた。震災前、この一帯は多くの人が暮らしやすかった。初めに来た人にはわからないだろう。「かんぼの宿松島」も撤去されることになった。被災地では、震災を伝える廃墟がなくなりつつある。しかし、復興が進んだかというところではない。仮設住宅に住む人々をほしめ、被災地の問題は3年半たった今も解決されていない。震災を風化させてはならない。震災の記憶も、今ある問題も、草の下に埋もれさせてはならない。(岡崎)